



香蘭社・上等の間の  
シャンデリア



笠の裏面 (写真提供：香蘭社)

## アメリカ土産のシャンデリア ～香蘭社・上等の間の歴史～

有田町内の本幸平にある香蘭社・上等の間（貴賓室）には天井にガラス製シャンデリアがあります。建物が建てられたのは明治10年（1877）。その前年、アメリカでは建国100周年を記念してフィラデルフィア万国博覧会が開催されました。有田から参加したのは明治8年に結成された合本組織香蘭社の手塚亀之助、深海墨之助、深川卯三郎の三人でした。このほかに通弁（通訳）として元佐賀藩士の江副廉蔵が加わりました。

万博の会期は5月10日より11月10日までの159日間でした。この時出品された製品は八代深川栄左衛門や深海墨之助・竹治兄弟、辻勝蔵らが製造し、高台内にはそれぞれの窯名とともに蘭のマークが入れられました。有田で留守を守った栄左衛門はアメリカに出張中の三人に対し、何度か手紙を送っています。

その一つ、明治9年7月8日付けのものが当館に所蔵されています。このとき栄左衛門も東京新橋に滞在していました。彼らの異国での慣れない生活と商売を気遣いながら、それぞれの留守家族の無事を知らせています。また、万博での香蘭社製品の評判を知らせてほしいことや、400日もかけて作った製品をアメリカまで送るにあたって博覧会事務局は何も保証しないことに対し、「誠に誠に残念至極」と嘆いています。

最後に久米様（久米邦武）から注文された「釣ランプ一品」を「私も一つ入用なので二つ買い調べてきて欲しい」と伝えています。

これが現在、香蘭社・上等の間にあるシャンデリアではないかと思われます。20年ほど前、改修工事を行った際に陶磁器製の笠の部分を天井から取り外したことがあり、笠の裏には明治12年に高柳快堂によって文様が描かれたと記されていました（写真下）。渡米した三人がこのシャンデリアを帰路一緒に持ち帰ったのか、あるいは船便で輸送したかはわかりませんが、アメリカ土産として持ち帰り、社屋が完成した後取り付けられたのではないかと思います。

改修当時シャンデリアの笠の部分は、煤で真っ黒の状態だったそうです。また、明治10年の深川家の正月客にはコーヒーが振舞われたことが「橘常葉日記」には記されています。電気がまだない時代、シャンデリアに灯りをともし、コーヒーを飲むという洋風の、文明開化の波は着実に有田に押し寄せてきていたのでしょう。

さらに9年10月23日付けの手紙ではアメリカの三人から来た手紙に対する返信として、彼らの奮闘をねぎらっています。ただ、この中で「大物類が売れないと大損害になるので値を下げてでも売るように」とハッパをかけてもいます。

明治の初め、それまでの佐賀藩の制度が崩れたあと、懸命に皿山の方角付けを模索していた人々の姿を、これらの資料は伝えています。

[本文中敬称略]  
(尾崎葉子)



香蘭社については「有田町史 陶業編Ⅱ、商業編Ⅱ」などにあります。橘常葉に関しては館報 No.55を参照ください。高柳快堂（1824～1909）は佐賀・久保田生まれの画家で、長崎や大阪で漢学や画法を学び、有田では白川に居住して子弟の教育にあたる傍ら、陶画を描きました。この絵を描いたのは55歳の頃と思われます。

# 皿山 2004 春 No.61

# 平成の皿山職人像

鑄込み職人・飯野政行さん（しん窯）

平成28年、2016年に有田皿山は創業400年を迎えます。この間、延々と受け継がれてきた有田焼の職人技があります。その一方で時代の変化や手工業の進歩などにより、日々刻々と形を変えつつある技もあります。

現在どのような技が有田にあるのか、また、どのような職人さんがいるのかを次世代の人々にも伝えたいと思い、“平成の今、活躍している職人像”をシリーズで紹介していきます。

第一回目は黒牟田・しん窯で鑄込み職人として仕事をしている飯野政行さん（40歳）です。

鑄込み成形の技法は明治6年（1873）のウィーン万国博覧会に参加した納富介次郎・川原忠次郎らがヨーロッパで習得し、これを陶磁器業者に伝授したといわれています。しかし、その便利な特質を会得するには至らなかったようで、佐賀県文化課の宇治章さんによれば、有田で一般的となったのは明治の中ごろではないかということでした。

また、波佐見町では大正6年に中尾山で鑄込み成形が始まったとされます。現在、飯野さんは「流し込み」と「圧力」の2つの方法で成形していますが、関係者によれば鑄込み成形が早い時期に始まり、圧力成形はおそらく昭和50年代に一般的となったのではないかということでした。

飯野さんはこの道20年。入社する前は車の塗装をしていたということですが、他の二人の女性と共に工房の鑄込み成形を担当しています。朝一番の仕事は泥しょうを作る作業から始まります。泥しょうは、陶土・水・ケイサンソーダ（陶土の粒子をバラバラにして流動性をもたせる働きをする）などを混ぜて作りますが、流し込みと圧力ではそれらの配分が異なります。

訪ねた日はレオポットという、マイセンから

きたレオさんが考案した製品を作っていました。石膏型は3つのパーツに分かれており、まず泥しょうを各石膏型に流し込みます。しばらくそのままの状態に置き、厚みが一定となつてから乾燥室に入れます。乾燥にかかる時間は夏場と冬場では異なります。この仕事で一番難しいのは、器の厚みを一定にすることだそうで、そうでないと個々の器の重量が異なってきます。また、取っ手や本体など部分的に作って接合する場合、乾燥の度合いを一定にしないと焼成後にヒビが入ったりすることもあるということでした。



鑄込み作業中の飯野政行さん

石膏型は磨耗しやすく、よく使われる型は1、2年で破棄されます。型の原型は町内の橋村整型、西有田町の金子整型、波佐見町の田川整型などで作られています。飯野さんが作るものはその日によって異なり、だいたい1日に50個ほどの製品を作るとのこと。

飯野さんにはもう一つの顔があります。それは手話の使い手でもあるということです。身内に聴覚障害の人がいて始めた手話ですが、毎週木曜日、仕事を終えた足で町の生涯学習センターに行き、同好の仲間と練習を重ねています。これは仕事にも役立ち、陶器市などに訪れる難聴者の方を手話で相手をするのはもっぱら飯野さん。焼き物用語など特殊な手話もマスターしているようで、これから有田町を訪れる障害者の方にも力強い職人さんです。

## コレ、何でひょうろ？

町内応法の前田重嗣さんより、とても変わった焼き物をいただきました。長さ19.7センチ、幅7.4センチ、高さ7.1センチで足形をしています。カラ焼を施し、その甲の部分には「靴下修理器」と「実用新案出願中」という文字が入っています。原田さんによれば「第二次世界大戦中か戦後の時代に、祖父達が作ったようだ」ということです。

今の子供たちには理解できないことかもしれませんが、少し前までは靴下に穴があくとお母さんが電球を使ってつくろったものでした。物が無い時代、物を大切に作る心と親の愛情、そんな思い出を持つ方もいらっしゃるのではないのでしょうか。電球が丸くカーブしたところに靴下の破れたところをあて、縫いやすくするのですが、全体に丸みを帯びたこの焼き物の作りは、この特性を取り入れて考案され出来上がったのだらうと思います。なかなかのアイデアです。



もう一つ、諫早市在住の橋本幸男さんからは丸いドーナツのような形をした焼き物が持ち込まれました。径5センチ、幅1.8センチで、焼成のためか一部分が無軸ですが、側面には染付で「購」という文字を四角で囲み、その下に「十六」という数字が書かれています。関係者の方に問い合わせしてみたのですが、用途も作られた年代もまるでわかりません。

その後、再度橋本さんより同型で文字が異なる資料が見つかったと連絡がありました。「粟倉」という文字を楕円状に囲み、その下に「十六」の数字が書かれているそうです。これらは長崎で発見されたので、あるいは波佐見焼かとも思い、関係者にも問い合わせましたが、見かけたことはないということでした。

ただ、染付で文字を書き入れ、釉薬を掛けているところから、何らかの使用目的があったことは推測できます。この製品について心当たりのある方は☎43-2678までご連絡ください。



## お知らせ

### 有田陶磁美術館開館50周年記念 「真葛香山」展開催

大樽にある有田陶磁美術館は今年開館50周年を迎えます。明治初年、窯焼きであり商人であった平林伊平が建てた焼物倉庫を、昭和29年に佐賀県初の登録博物館として開館したのが当美術館の歴史の始まりです。

それを記念して、明治期の陶芸家として世界に名をはせた真葛香山の作品を中心に企画展を開催します。

期間は4月29日から6月末日まで。多くの皆様のご来館をお待ちしています。

### 時代小説「紅けむり」連載、始まる

前号でお知らせしましたが、直木賞作家の山本一力さんによる連載小説「紅けむり」がいよいよ始まりました。時は寛政、舞台は有田皿山です。有田を取材中はまだ素材を探す段階だということでしたが、東京への帰路ではすでに構想が出来上がったとのこと。「それほどまでに有田ってところは面白いところだ」と山本さんは語っています。

連載は「小説推理」という月刊誌ですが、最終的には単行本として出版されるようです。それまで待てないという方は、当館で読まれることをおすすめします。

### 「ミュージカル 百婆」上演決定

有田皿山の歴史の中で唯一名前が残っている女性という、誰もが思いつのが「百婆仙」ではないでしょうか。豊臣秀吉の朝鮮出兵で日本に連れてこられた陶工・宋伝の妻で、夫亡き後武雄・内田から一族郎党を引き連れて有田に移住したという女性です。

百婆仙をモデルにした小説「龍秘御天歌」が芥川賞作家の村田喜代子さんによって出版されたのは平成10年でした。発行当時、文芸評論家の池澤夏樹さんは「異文化間の差異をいかに隠しつつ生かすかという知恵の戦いの話で、この地に張った作者の根の太さと深さがよくわかる」と評しています。

この原作をもとに、来年4月から秋田を本拠地とする劇団「わらび座」によって、「ミュージカル百婆」の演題で全国各地での上演が決定しました。「わらび座」関係者によれば初演は是非とも有田という思いを持っているとのこと。これから詳細が決定していくことと思いますので、順次お伝えしていきたいと思っています。



## もっと勉強しよう

2月7日・8日の二日間にわたり九州陶磁文化館で「第14回近世陶磁学会」が開催されました。

今回のテーマは「受容層の違いによる九州陶磁の様相」で138名の出席でした。遠くは山形市教委、斉藤氏による「山形城三の丸跡で出土した九州の陶磁器」をはじめ、京都・公家屋敷出土の有田焼、江戸の大名屋敷出土の陶磁器、大阪、四国、沖縄で出土の肥前陶磁器の解明が、それぞれの埋蔵文化財研究者の方により発表されました。それと同時に京都、江戸、広島などで発掘された禁裏ご用品・辻家の陶片などその特長が解説されました。

この会場には、全国各地から大学、教委、陶磁器研究者が出席し、九州陶磁文化館・大橋副館長をはじめ事務局の方々の世話で充実した会議となりました。

会場を見回して見ると、有田町からの出席者は、僅か8名でした。出席者の10%にも満たないのです。有田町でこんなに素晴らしい研究発表があつて、全国各地から見えているのに、今の有田の人々は意欲を失くしているのでしょうか。先人の苦勞を知り、現在のニーズに応える有田焼を今こそ考えないといけない時期にあるだけに、一抹の寂しさをぬぐいできませんでした。

明年は、この近世九州陶磁学会も第15回を迎えることとなり、2月11日～13日の3日間、中国・韓国の陶磁研究者6名を招聘し開催することが決定しました。

地元で、こんなに有意義な学会が開催されるのですから、町民の皆さんも、この機会を逃さず、しっかり勉強し、有田焼の発展に貢献していただきたいと切に思う次第です。

学会入会申し込みは九州陶磁文化館藤原友子さん  
(☎0955-43-3681 年会費1000円)まで。



## 感謝をこめて「第101回有田陶器市」を

今春の有田陶器市は101回の大きな節目のスタートです。大不況のさなか、有田の業界が厳しいことは言うまでもないことです。

一昨年(平成14年)秋、当館で有力者にご出席いただき「陶器市座談会」をいたしました。そこには今年の101回陶器市を成功させる為の良いヒントが沢山あります。紹介いたしましょう。

- (1)有田町挙げて、来訪者をおもてなしする心が大切。温もりのある気遣いをもってお迎えしましょう。
- (2)陶器市100回を迎え(昨年)、モノ作りの原点に戻る。商いの原点に帰ること。来訪者が満足する本モノのやきもの、有田の歴史、ロマンをやきものの中にしみこませよう。
- (3)良い「やきもの」を作る向上心が大切。「かき」「だみ」など掘り下げて勉強せんといかん。良い「やきもの」を作ろうとお互いに励ましあおうではないか。
- (4)「やきもの」を作る人には、「やきもの」が勝負という真剣味が、まだ足りない。安易に流れないようにすることが、いま求められている。
- (5)町民挙げて有田の街をきれいにしようではないか。すくなくとも自分の家の周りは自分で掃除をして、来訪者を清々しい気持ちでお迎えするようにしよう。
- (6)陶器市期間中、やきものの店としてお貸しいただく方は、どうか良識のある家賃でお貸しいただきたいものと、座談会で語られています。

伝統ある「やきものの街、有田」は町民の誇りです。それに内山地区の伝統的建造物群に来訪者は目を見張ります。この有田の街に来ていただくお客さま、本当に「ありがとう」と皆でお迎えしたいものです。

(久富 桃太郎)

## 季刊『皿山』

通巻61号(平成16年3月1日)  
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1  
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185